

盧隱『海濱故人』再論

——自意識としての「知情交戦」——

高屋 亞 希

1 はじめに

異性からの情を受け入れることが女性にいかにか葛藤をもたらすか、というテーマを盧隱は繰り返し書き続けたが、中篇小説『海濱故人』はこのテーマで書かれた最初期の小説である⁽¹⁾。まず梗概を確認しておく。

露沙は人と協調していくことを意に介さず、己の強い意志を貫いていく性格で、限られた友人たちとだけ親しく交際している。周囲の情に動かされることがないかのように超然と振舞う露沙が、他方では喜怒哀楽といった豊かな感情表現を見せるため、友人たちは露沙に情があるのか否か、はかり難く思う。そのような露沙に愛情を寄せる、梓青という異性が出現。だが露沙は自分の信念に合わないとして、梓青からの愛情を拒絶する。一方、親しかった友人たちも、それぞれ異性から愛情を寄せられる。異性からの愛情に心をひかれながらも、親の反対で交際を断念する者もいれば、親を説得して異性との交際を貫く者もいる。露沙と一番の親友だった宗瑩は、異性からの愛情を受け入れて交際を始める。戀人との関係が親密になるにつれ、これまでのように露沙と毎日付き合うというわけにはいかない。友情も當てにならないものだと嘆く露沙は、寂しくてならない。これまでの信念の通り梓青からの愛情を退けるか、それとも受け入れるか。葛藤の末、露沙は愛情を受け入れる選択をする。

小説中で大きな轉換點をなす、露沙が終に愛情を受け入れる場面について、敘述はその心理的葛藤を「知情交戦」と表現している。異性からの愛情を拒絶しようとする知と、受け入れようとする情⁽²⁾。従來の先行研究では情を、異性同士が互いに向ける愛情、即ち自由戀愛という新しい價值觀に則った肯定すべき感情と位置付けてきた。そのため情の對立概念である知については、個人の戀愛感情を抑制しようとする儒教倫理規範として、解釋される傾向にある。つまり「知情交戦」は、傳統的な倫理規範を内面化してきた女性が、自由戀愛

という新しい価値を選択する際に感じる、内心の葛藤ということになるだろう⁽³⁾。

確かに異性との愛情が、露沙たちに大きな葛藤、即ち「知情交戦」をもたらすのは事実であるが、疑問は残る。と言うのも、『海濱故人』に於いて情という語は、友人たちとの友情や親子同士の愛情等、登場人物を取り巻くあらゆる関係に現れており、異性との愛情だけにとどまらない。そもそも露沙は周囲の情に動かされない性格として設定されているのだから、露沙を取り巻く人間関係の中で、異性から寄せられる愛情だけが例外的に彼女に葛藤をもたらすのか否か、という點が先ず問われなければならないだろう。本稿では登場人物たち、とりわけ露沙の意識に於いて、彼女たちを取り巻く様々な人間関係の中に現れる情が、どのように位置付けられているのか、そうした情を抑制しようとする知とは何であるのか、検討する。その上で、「知情交戦」が持つ意味を改めて考えてみたい。

2 知情の分離

小説冒頭部分で、敘述は露沙等、主要登場人物たちを紹介しているが、そこに知と情という語が對比的に現れる。

彼女たち五人は容貌も氣性も全てははっきり違っていた。露沙は痩せた顔立ちと體格ながら非常に意志が強く、友人たちが與えた賛辭は“短小精悍”。氣性はさっぱりしているが、考えの方はとても深く、世界の謎を既に見破っているかのようで、人々との付き合いにはいつもふざけた態度をとっていた。玲玉は情感に富み、體格はひどく痩せて弱々しく、人々からの贊美や慰めをよく好んだ。彼女は世界の偉大さや神祕というものは、ただ愛のみがなせる技だと考えていた。笑うのが好きだったが、泣くのはもっと好きで、雲青と一番仲が良かった。雲青は理知が感情よりずっと強い人間だった。時として苛々して、十分に玲玉を慰めることができないと、玲玉の方は必ずや隠れてこっそりと涙を拭い、時にはついに大聲で泣いたりすることになるに違いなかった。〔p122～123〕

先ずは情が何を指しているか、情に富むとされる玲玉について検討してみ

る。玲玉が贊美や慰めといった自己を肯定してくれる言葉を、周圍から聞くのを好んでいること。そして、少しでも自身が期待するような肯定を、周圍が與えてくれない事態に遭遇すると、すぐに傷つき泣き出すことが分かる。つまり玲玉は、自身が内心持っている自己像と、他者によって眼差された否定的自己像との間に落差が生じ、緊張が引き起こされることを徹底的に拒絶していると言えよう。現實の他者と緊張を生じる場面も多々あるにせよ、その緊張に耐えてまで他者と對立することを自ら選ぶとは、考えにくい性格であることが想像される。

もっとも、よく泣くことになるという記述から、こうした玲玉の願望とは別に、他者との關係で緊張する場面は、頻繁に繰り返されるのだろう。それでは玲玉は、緊張が生じない關係を誰とどのように實現するのだろうか？ 同じく情を語るのが好きな、友人の宗瑩との付き合い方から、それがどのようなものであるかが伺える。

“あらら、お二人さんったらもったいぶっているみたいで……人のことも構ってくれやしない。”と〔玲玉は〕言いながら、首を傾げ彼女たち〔=宗瑩と露沙〕が笑いかけるのを見つめた。“さあ、いらっしやい！……あなたのことが一番好きよ！”宗瑩はそう喋りながら歩み寄り、玲玉の手を取った。玲玉は宗瑩のすぐ傍らに座り、頭を彼女の胸にもたせかけた。“本當に私のこと愛している？……本當に？”……“どうして嘘だなんてことあるかしら？”答えながら宗瑩は、そっと彼女の手口に口吻をした。露沙は冷ややかに笑った。“やっぱりその名に背かないわね。情好きが一緒になると、すぐこういうわざとらしいことをするのだから！”玲玉が口を挟んだ。“もう！世界で一番あなたには愛というものが無いわ。ちっとも人を愛するということがないんだから。”露沙は物悲しい様子を見せた。“自分を愛する餘裕さえないのに、他人を愛するなんてできて？”玲玉は少し怒り兩頬を赤く染めた。“露沙ったら、薄情なんだから！私泣いちゃう！泣いちゃうんだから！”そう言って本當に目のまわりを赤くした。露沙が言った。“さあもういいから、いいから。からかっただけよ。……私にたとえ情がなくても、あなたのことはずっと愛しててよ。それ

でいい？” [p150～151]

ここでも玲玉は、相手から自分を肯定する言葉を暗に引き出そうとしている。それに對して宗瑩の方も、愛していると口に出し、更にはスキンシップでも自分の愛情を相手に示す。玲玉は口には出さないものの、頭を相手の胸にもたせかけるといったスキンシップで、同じく自分の愛情を相手に示している。つまり二人は、愛情という相手に對する肯定を與えあうことで、自分に對する相手側の肯定を引き出しているのである。換言するとそれは、それぞれが互いに相手を鏡として自己像を映しあう、相互依存的な關係と言えるだろう。その時、それぞれにとって相手の存在とは、あくまでも自分を映す鏡であり、同時にその鏡に映った自己の鏡像に過ぎない。従ってこの瞬間、自己と他者の區別はなく、合わせ鏡の中で自他が境界線を失い、一體となった状態が出現していることになるだろう⁽⁴⁾。

だがこの玲玉が願望するような、自他の區別が融解した關係は現實的なものとは言えないだろう。玲玉をとりまく周囲の人間關係の全てが、いつ如何なる場合でも彼女に對して、無條件に肯定を與えるとは限らない以上、玲玉は他者からの否定的な眼差しに傷つき續けるしかない。實際、宗瑩との自他の境界線が消失した瞬間、そうした二人の愛情交換を眺める露沙の醒めた眼差しが、玲玉の心にたちまち緊張をもたらしている。逆に言えば、現實の他者との緊張を強いられるからこそ、玲玉たちはその緊張を回避すべく、相手のために互いに鏡を差し出しあい、自他の龜裂のない二人だけの空間を創出しようとしていた、とも考えられる。二人の愛情交換を露沙はわざとらしいと評していたが、現實にはあり得ない關係を現實に取り戻そうとする、二人の懸命な努力をそこに見ていたのかも知れない。

それでは、もう一方の知はどうだろうか？ 小説冒頭の登場人物紹介で、雲青は感情より理知が勝ると記述されていることから、両者が對立概念であることは想像されるが、具體的に何を指しているのかは曖昧である。知というものが自分にどのような變化をもたらしたか、宗瑩が自身の思い出を語っている場面を検討してみる。

“〔前略〕幼かった頃、兄弟姉妹がいなかったので、両親は私を溺愛していたわ。学校にも入れてくれなくて、年寄りの讀書人を一人招いただけ。《毛詩》や《左傳》を讀むのを教わったり、暇な時に幾つか詩を作るのを學んだり。一日も外に出ることなく、何が世界なのかも知らなかったし、両親に頼りきって何の心配事もない生活を送る以外に、他のことは何も考えなかった。あの時、餘所の人は私のことを惜しい、かわいそうだとすら思ったかもしれないけれど、その實、私自身はちっともそう思っていなかったのよ。後に親戚の一人が始終、學校の生活や様々な常識について話して聞かせてくれたのだけど、それが知らず知らずのうちに、私を悩みの道へと引き込んでいったの。以來、自分の生活のどれもこれもが正しくないし心地よくない。それであらゆる手を盡くして學校に入れてくれるよう両親にお願いしたんだけど、學校に入ると、人生觀が完全に變わったわ。親戚も許せないし、両親も許せない。日一日と自分が孤獨だと感じるようになって、憂いとか、退屈とか、次第に發見したし。……知識は私を誤らせたのじゃないかしら？”〔p153～154〕

親が自分に對して溺愛という絶對的な肯定を與えていたこと、そして自分も親に對して完全に信頼を置いていた、という幼年期の思い出を宗瑩は語っている。情という語こそ使われていないが、これはまさしく前述した、相手を鏡として自己像を映しあう、情に基づく關係であることは言うまでもない。親の期待に沿った形でしか自分の人生を考えていなかった宗瑩が、學校教育を受けることによって、それとは別の自分なりの價值觀を持つようになる。親が期待する像とは異なる自己像を抱く局面も多々あったのだろう。その途端、親との間に成立していた、情を應酬しあう一體關係に龜裂が入り、親は自分に否定的な眼差しを投げかける他者として、對象化されることになる。こうした事態をもたらしたのが知であると宗瑩は認識していることから、知に基づく關係とは即ち、自分の價值觀に沿って自身の實現を圖るにあたり、それに對して否定的な眼差しを向ける他者との間に、緊張や孤獨を強いられるようなものだと考えられる。宗瑩のこの科白の直前に、露沙と雲青もまた、知が自分たちに懊惱を與えるばかりであったと、宗瑩と同様の見解を述べていることから、こうした知

についての認識は、彼女たち共通のものと考えてよいだろう。

高等教育を受けるエリートとして、それぞれ将来への夢を抱く彼女たちは、自他の別がない幸福な一體感を味わった樂園を自らが追放された身で、もはや後戻りはできないことを十分に知っている。であるならば「知情交戦」とは、樂園を追放された彼女たちが、他者と對峙する孤獨や緊張に耐えて知がもたらした世界に留まり續けるか、その龜裂を情による関係によって一時的にせよ忘却するか、という二者擇一の選擇を指しているのではないだろうか？

3 知への意志

情に基づく関係を重視する宗瑩と玲玉の二人は、露沙について“一番情がないのは露沙ね。永遠に人を信じようとしないのだから” [p132] と噂しあう。情が相手に對する肯定である以上、自分が相手を肯定し情を差し出しても、相手はにべもなく自分のことを拒絶するかもしれない。逆に、肯定したくない相手から一方的に情を向けられても、それに應えることもできない⁽⁵⁾。露沙がいかなる人をも、情を差し出す相手として信じようとし、即ち肯定を與えようとしないのであれば、情に基づく関係を彼女は豫め放棄していることになるだろう。それではなぜ、露沙は誰も信じようとしないのであるだろうか？

最初に不幸 [= 異性との戀愛] が襲ったのは、他ならぬ露沙だった。彼女は幼い時に、冷酷な環境の感化をいやというほど味わったので、偏屈で意地っ張りな氣性を身につけてしまった。しかし天性はたいへん感情が豊かでもあったので、彼女はつまるところ知と情が調和していない人間であった。 [p143]

露沙の天性は情に富んでいるという記述から、今もなお彼女の中で情が完全には否定されていないことが推測される。だがそのような天性に對して、偏屈で意地っ張りな態度を取るということは、内心惹かれる情を意識的に拒絶していることになるだろう。興味深いのは、露沙が情を拒絶する原因が幼い時の環境にある、との記述である。

露沙の幼い頃の家庭環境については、小説冒頭近くで露沙自身と宗瑩が延々

と語っている。二人の話は、裕福な家庭に生まれながらも、両親から疎まれて乳母に預けられる等、親をはじめとする周囲が情を無条件に差し出して、自分を肯定してくれることを望んでも、それが得られなかった孤獨な體驗と要約される。つまり露沙にとって情とは、自分が相手を肯定し情を差し出しても、相手は自分のことを肯定してくれるとは限らない、非對稱的な關係だと考えられる。この精神的に傷つけられた過去の體驗をもとに、露沙は相手に傷つけられることを最初から回避すべく、情を交換しあう關係は信ずるに足りない、という信念を抱くに至ったのだろう。両親に溺愛されて育った宗瑩等、他の友人たちにとっての情が生得的に與えられたものであり、回復されるべき原初の樂園として意識されているのとは、非常に對比的である。

露沙が最初から情を拒絶することを決めているならば、論理的には彼女に「知情交戦」という事態はあり得ない筈であろう。しかし、實際はそうではない。

ある日の哲學の授業で、彼女〔＝露沙〕は鉛筆を持って先生が口述する言葉を筆記していた。その時、先生はちょうど人生觀の問題を話していたが、その中に“結局のところ人生で何をするか？”という言葉があった。この言葉を聞いて、突然考えが次から次へと湧きおこり、彼女は鉛筆をとめた。先生が續けて何を言ったのか？ もうそれ以上聞こえず、ただドキドキしながら自分の思いを巡らすだけだった。“結局のところ人生で何をするか？……”考えはあっちへ飛びこっちへ飛び、戀愛の問題のことを突如思いついた。“若い男女とは、荅がふくらみ咲こうとしているバラの花のようなもの。美しい色は自分を慰めたり、他人を誘惑したりするのに十分だし、芳しい香りは自分を満足させ、他人を戀々とさせるのに十分である。しかし花が萎れ、葉が枯れてしまうと、他人は捨ててしまい、自分は嫌いになってしまう。花や木は、時間や空間の支配を避けることはできない。人もまた同じ。それでは結局のところ人生で何をするか？……實際なすべき何があるのか？戀愛も同じではないだろうか？若い時には互いに愛し合うが、愛し合った後はどうなるか？……演劇と同じで、結末が悲しかろうが喜ばしかろうが、どのみち空疎！その上、戀愛の花には、しばしば苦惱の葉が取り合わせてある。どうやってこの恐ろしい罠から逃

れ、生涯煩わされないでいようか？”〔p143～144〕

若い男女の戀愛關係が永遠不滅のものではなく、時空の推移に伴って變化を餘儀なくさせられるものである、と情を交換しあう關係が信ずるに足りないものだ、との認識がここでも繰り返されている。注視すべきなのは、一時的にしか成立し得ない關係を信じてどれほど熱烈な情の交換を行っても、その行爲は結果的に空疎な意義しか持たない、と露沙が否定的評價を下している點である。自分の人生をそうした空疎なものに浪費することを避けようとする文脈で、“人生で何をするか”という問いが露沙の意識の中でクローズアップされることから、永遠に確固としたものを自身の據り所とし、己の人生を有意義な行爲で満たそう、という強迫觀念に彼女が突き動かされていることが想像される。もっとも露沙が、自身の人生を投入すべき永遠不滅のものとして、具體的に何を想定しているのかは不明である。ただこれが、情から身を遠ざけようとして選擇する行爲であることを考えると、他者との間の緊張をも辭さず、自分の價值觀に沿って自身の實現を圖る、知がもたらした世界への志向を想定してもよいだろう。

知の世界を選擇することを決意する一方で、露沙自身、それは容易ではないと危機感を抱いていることも伺え、興味深い。情を畏と稱し、それから逃れるにはどうしたらよいかと悩んでいることから、情が自分自身を含めて人を引きつける強い力を有している、と考えていることが分かる。ここでの露沙は、自分が情に巻き込まれないようにどれほど警戒を拂い、情を拒絶することを豫め決意していても、自身に「知情交戦」という事態が十分に起こりうる、と豫想しているようにも讀める。

事實この場面の直後、露沙は梓青から愛情を告白され、「知情交戦」が現實のものとなる。勿論、情という當てにならない關係に自分の努力を投入することは、露沙にとっては浪費でしかない以上、梓青からの愛情も拒絶するしかない。周囲の友人たちもそれぞれ異性から愛情を告白され、それを受入れるか否かで悩む。そうした折、露沙は雲青への手紙の中で、自分たちが直面する情について、言及している。

この世はあたかも蓮の花の甕のようです。人類はまるで甕の中の小さな蟲。どれほど聰明であってもこの世の束縛を逃れることはできません。別れに際したあの晩のことを回想しました。私たちが話した理想の生活——海邊に精緻な家を一軒建て、私と宗瑩は海に面した窓を開け、偉大な作品を書く。あなたと玲玉は海沿いの村で、無邪気な子供たちに勉強を教える。そして夜、家に戻って海邊の草地で食事をして話をする。どれほど楽しいことか——しかしこの話も恐らく、永久に理想のままではないでしょうか！あなたもご存じのように、宗瑩も既に愛情の渦の中へと深く陥っていますし、玲玉も劍卿を愛する趨勢にあります。これは彼女たちのことですが、私たちの方はどうでしょう？〔中略〕私の人となりについて、學校で友人たちは皆ひどく冷淡で薄情だと批判します。しかし実際には、この世の蟲が最高に情を忘れようとするならば、ただ〔内心の〕情〔の存在〕を偽るだけのことです！ある者は情——世のいわゆる多情——を用いるのが好きですし、ある者は情を用いるのが好きではありません。でも〔そういう人は〕、もしもひとたび〔情を〕用いたら、多情の者よりもずっとひたむきなのではないのでしょうか？あなたは情がないのではなく、ただ情が深いだけなのだと信じています。〔p155 ~ 156〕

露沙がこれまで友人たちと共に、作家や教師といった社會的事業で自己の實現を目指し、そのことによって何らかの精神的な楽しみや慰めを得よう、と考えていたことが分かる。この彼女たちの理想が、異性ととの情に巻き込まれることで實現が困難になったと嘆いていることから、こうした社會的事業での自己實現こそが、前述した人生を投入するに値する永遠に確固としたものを指している、と言えるだろう。情から慰めを得るのが他者と肯定を與えあう關係に依存していることを考えると、將來の自分に對して現在の己の全ての努力を投入しようとする露沙の決意は、當てになるのは自分自身でしかない、という彼女の信念の現われと言えるかもしれない。それはつまり、露沙にとって全ての人が他者であり、逆に彼女は全ての人にとって他者である、という孤立を選択したことになるだろう。

事業を慰めとする言葉は露沙に限らず、友人たちによっても繰り返されてい

る。例えば、玲玉は婚約を露沙に報告した時、“事業の慰め”〔p166〕があるので、異性との情が成就するか否かはどちらでも構わない、と語っている。また宗瑩も結婚の前に、“以前話していた、學問を求めて書物を著すという言葉を引き込めてしまった”〔p173〕と露沙に評されて、自己實現への努力を放棄したわけではないと反論している。友人たちも皆、社會的事業で自己實現を果たすことに、自身の慰めを見出すと意識しており、情に基づく他者依存的な關係を避けて知の世界を志向する、露沙の決意と共鳴していると言えよう。兩者に相違があるとすれば、露沙の場合、知と情のいずれかしか選擇できないと考えているのに対して、友人たちは知と情の兩立は可能と考えている點である。

無論、梓青から差し出された情に、露沙も心を惹かれてはいるだろう。自分たちが完全に情を忘れることなど出來ず、情の存在を偽ることしか出來ないという露沙の言葉は、彼女の胸中に秘められた情への傾倒を示唆している。従って「知情交戦」はことある毎に、露沙の意識の中で繰り返されることが豫想されるが、彼女はそれをどのように切り抜けるのだろうか？

4 異物としての情

露沙自身は知か情かという極端な選擇肢の間を揺れ動いているが、知と情を兩立させようとする友人たちに對して異議があるわけではない。だが友人たちが、異性との情に多大な努力を投入するとなると、話は別である。

雲青が言った。“今夜の月は本當にきれいね。もともとは玲玉と宗瑩も誘って私たち四人でお喋りして夜を明かそうとしたのだけど。でも劍卿と師旭〔＝玲玉と宗瑩の戀人〕が彼女たちにまとりついているもので、來られないのよ。——友達も本當に當てにならないものね。初めは情が濃くて、仲良しであっても、最後には一人また一人といなくなってしまう。過去のことを思うと、ただ恨めしいわ。道理で妹が私のことをバカだって笑うわけよ。私ったら本當に人を信じすぎるから！”露沙が言った。“世界の事って、本來はそのようなものよ。人を信じて結果は孤獨を免れない。たとえ人を信じなくても、やはり世界の孤獨を感じないではられないものじゃない？ つまるところ、變わりやすい人類に〔人生の〕慰めを

求めても、結局は頼りにならないのよ。私たちやはり、自分に對して慰めをを求めることをもう少し早く覺悟しないとね！”〔p168〕

久しぶりに集まってお喋りに興じようと、雲青が月見を企畫する。しかし集まったのは、異性ととの交際を拒絶した露沙と雲青の二人だけで、宗瑩と玲玉はそれぞれ戀人との交際に時間を取られ、露沙たちと行動を共にすることが儘ならない。露沙から見ると、自分たちとの付き合いが等閑にされ、戀人との關係に大半の勞力を費やしているということが、情に溺れて“自分の前途を忘れ”〔p173〕ているということになるのだろう。この月見の集いも、友人たちを情の世界から引き戻そうとする試み、と讀めるかも知れない。そしてこの目論見は見事に失敗したことになる。もはや昔日のような友人たちとの交際が取り戻せないという現實に直面して、友情、即ち友人たちとの情に基づく關係も當てにならないと、取り残された雲青と露沙は嘆く。

露沙たちが圖らずも表明していることは、彼女たちが自己實現の過程そのものに、人生の慰めや喜びを見出していたわけではなく、それを目指す友人同士が互いに相手を肯定しあう關係、即ち情に基づく關係から、より多くの慰めを得ていたということである。いかなる人の情も信用できないと拒絶してきた露沙にとって、自分自身これは思いがけないことであつたと思われる。換言すると、知がもたらす世界を選択することに伴う孤獨を甘受すると言っても、これまでは觀念的な空論に近いものであつたのが、無二の親友たちとの關係が疎遠になることで、全ての人が己にとって他者であるという孤獨な現實に直面したとも言えるだろう。情という他者依存的な關係から、自分も逃れられないと自覺した露沙にとって、もはや「知情交戦」で情を拒絶し知を選択することは、自明のことではない。そうした最中、露沙も含め誰一人自分に同情してくれる、即ち肯定を與えてくれる者が、今後も現れないことが確實ならば生きていく意味がない、と訴える梓青からの手紙が届く。手紙を讀んだ露沙は、自らも梓青に情を與えるべきか否か、「知情交戦」という葛藤を経て、ついに初めて“情が勝利”〔p170〕する⁽⁶⁾。

“多くの聰明な人たちが皆で私にこう勧めます。‘あなたの地位や能力を

以ってすれば、社會でめざましく伸びる機会があるのに、どうして自分を閉じ込めるの？’この言葉は善意から出たもので、私とてももちろん感謝しています。しかし他方ではその人のことを恨まずにはいられません。人のことをちっとも理解してくれていないのですから！……もし人類が世界で生活するのに、ただ衣食の二つしかなかったとしたら、私はとっくに激しい荒波に身を投げて、今日まで生きてなどいなかったでしょう……周囲によって轉々と變化して世に譽めそやされるよりも、いっそのこと自分が思う通りにやって、悪名を永遠に残す方がよくはないでしょうか？枯れ果てた世界で、精神上の抑制することなどできない情の慰めを除き、他に何か潤いを與えてくれるものがあるのでしょうか？……”〔p170〕

情の選擇を決意した後で同性の親友の一人に宛てた手紙であるが、梓青との交際が悪名という否定的評價を周囲から受けることを、露沙が承知しているのが伺える。これまでも友人たちは皆、梓青が既婚者であることを懸念し交際に反対していたが、露沙はそうした反対を念頭におきながら、この手紙を書いていたことになるだろう。

反対する友人たちに向けて、露沙は「知情交戦」で自分が迫られていた選擇がどのようなものであったか、申し開きをしている。社會的な自己實現に努力を投入すべきで、情によって自分の可能性を縛る必要はない、と露沙は周囲の意見を要約した上で、それに對する反論を展開している。もっとも周囲が反対しているのは、情を選擇するという一般的な行爲にではなく、梓青という特定の個人との交際に對してなのだから、ここでの露沙の論理はかなり恣意的なものと言えよう。とりあえず露沙の論理に即して見ると、情という己を相手に肯定してもらふ相互的な關係を完全に排除すると、己に對立的な他者だけが周囲を取り圍み、自分が人生という荒波を乗り切っていくための慰めを得ることができない。ひいては自死という結末も考えられるので、情の拒絶を勧める周囲の反対は承知しているが、人生の慰めを得るために、自分は敢えて情を選擇するという論法をとっている。幾ばくかの情による慰めがあつてこそ、はじめて知の世界での他者との緊張にも耐えられる、と露沙は考えるようになっていたことになるだろう。

しかし露沙が迫られていた選擇には、もう一つ別の側面があったと思われる。情に基づく關係を選擇することで、自他の境界を取り拂って、完全には當てにならない他者へ努力を傾けた擧句、自己實現を行う意志的な主體を放棄させられる危険を犯すか？ それとも他者に肯定してもらおうという相互依存的な關係を完全に排除し、他者ひいては社會といかなる接點をも持たない、超越的で孤獨な自己を確保した上で、その自己を目標に従って實現させるか？ つまりこれまでの露沙にとって「知情交戦」とは、自己と他者という二項對立を前提に、自分を他者という異物に明け渡すか否か、という選擇肢であったと考えられる。従って梓青からの情を受入れることは、意志的な主體が確保される範囲内で、他者を自己の内に意識的に請じ入れて、必要な分だけ情による慰めを獲得しようとする試みだったのではないだろうか？⁽⁷⁾ これ以降の「知情交戦」は、これまでのような情を受け入れるか否かという水際での攻防戦ではなく、受け入れた情に己を完全には明け渡さないよう、警戒防御するという形で續行することが豫想される⁽⁸⁾。

5 おわりに

梓青からの情を受け入れることを決めた矢先、露沙は母親も亡くす。自分を肯定し情を與えてくれる人がまた一人周圍から消え、更なる孤獨感が露沙を襲い、“生命の障害物と戦う勇氣” [p177] がないと嘆く。他者との緊張に耐える孤獨は益々耐え難いものになり、露沙は梓青から寄せられる情に一層依存するようになる。でもそれは果たして、傳統的な儒教倫理規範に対する個人の勝利だったのだろうか？

彼女 [= 露沙] は [母親が亡くなった] 現在、気がかりになるものは更になくなった、と思った。 [中略] 造物主が [己を] 弄ぶに任せる決意をした。體を少しも大切にしようとせず、生死の境界を既に取りはらってしまった。 [p179]

運命を主催する造物主と戦う氣力がないという言葉が、この後、露沙の口から繰り返され、己の意志を以てしても自身の人生すらどうにもならない、とい

う意識が出てくる⁽⁹⁾。そこにはかつてのような、他者との緊張をものともせず、自己實現への自信を持っていた、あの意志の強い露沙の姿はもはや見あたらない。1920年代初頭、他者に己の人生を支配されまい、というエリートとしての強い自負を抱いていた露沙は、異性からの情を受け入れることと引替えに、思い描いてきた未來の青寫眞を手放す。その現實を、彼女自身、一體どのような思いで受け入れていたのだろうか？

註

- (1) 『海濱故人』は『小説月報』14卷10・12期（1923年）に連載。単行本は1925年7月に、上海商務印書館から刊行された。本稿では第3版（1926年10月）を使用し、引用ページは括弧内に記載した。
- (2) 「知」は「智」「知識」「理智」等、「情」は「感情」「情感」「愛情」等の複数の表記が現れており、本稿でも必ずしも表記を統一しているわけではない。
- (3) 「知情交戦」が具體的に何を指すのか、踏み込んで論じたものとしては、劉思謙『“娜拉”言説——中國現代女作家心路紀程』（上海文藝出版社、1993年12月）がある。先行研究の多くは、小説中の登場人物が異性からの情の受け入れを巡って、逃避的な態度をとることについて、個々の小説に即して具體的に検討するのではなく、作者である廬隱の悲觀的な人生觀にその理由を求める傾向にある。葛城明子「廬隱に関するこれまでの評價について」（『長崎大學教養學部紀要（人文科學篇）第38卷第1號、1997年9月）も、廬隱その人と作品中の人物を結びつけて考える傾向について、疑問を表明している。
- (4) 情に基づく関係は、精神的な雙子としても表象されている。宗瑩と玲玉が情こそ人生の楽しみであると語りあう場面で、お揃いの服や靴を身につけ、手と手をつないでいる蘭香と孤雲の姿は、誰もが見るだけで二人が大親友であることが分かる、という話題が例として出てくる。相手を肯定しあう関係が、外見においても互いを模倣しあう、という形で視覚化されていることになるだろう。
- (5) 短篇小説『麗石的日記』で、情の交換は當事者雙方の主體的な同意があってこそ、“自然で神聖”なものになるのであって、一方で同意がない場合は單なる情の押しつけであり、相手への“侮辱”の意味すら持ち得る、との認識が主人公の女性によって示されている。
- (6) 註(3)の前掲書で劉思謙は、廬隱の初期作品に於ける「知情交戦」の意味について考察し、“幾人かの主要人物の愛情や結婚には知が情に勝利するのみで、情が知に勝利する事例がない”と述べている。実際には、『海濱故人』でも露沙のみならず登場人物たちが、次々と異性からの情に巻き込まれる事件をテーマにしており、且つその大半がその異性との交際に踏み切っている。「知情交戦」という葛藤を経ているか否かを問わなければ、情が勝利する例は、他にも枚舉にいとまがない。例えば短篇小説『淪落』は、命の恩人だった既婚男性と再會を果たした少女が、感謝の情に流されるままにその男と肉體關係を持ってしまい、不幸な結末に

陥るという内容である。「知情交戦」という葛藤は全く認められないものの、無防備に情に己を任せること、即ち情の勝利が女性にとってどれほど危険を孕んでいるか、という側面を描いた小説と言えるのではないだろうか？ 廬隱の小説では寧ろ、知が完全に情に勝利する事例の方が少ない、という印象を受ける。

- (7) 紙幅の関係で言及しなかったが、友人たちの中で雲青だけが、親の反対に押し切られて交際を断念している。雲青は老いた母親の世話をするために、社会での自己実現を諦めて田舎に戻り、情に煩わされることもない静かな生活を送る。露沙はそうした雲青の境遇を羨むと共に、雲青にそうした生活が可能なのも、彼女の母親がまだ健在で、親子同士愛情で互いを支え合う関係があるからだ、と意識している。
- (8) 現実には露沙自身が警戒していた通り、彼女は梓青の求めに応じ、北京でのキャリアを捨てて、彼のいる上海へ行くのを決意したことが、小説結末部分で暗示されている。露沙は社会的な自己実現を断念するに等しい己の選擇を、友人たちに向けて正当化しようと試みているが、この点については、拙稿「廬隱『海濱故人』試論——著述家というセルフイメージ」(早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第26期、2000年12月)で論じている。またこの拙稿では、情を異性間の戀愛に限定した上で、その戀愛を巡る行為が世間でもよく行なわれる紋切り型であることから、戀愛行為、及び戀愛感情が他者に強いられたものだ、と露沙が意識していたことを指摘した。本稿では、情を広く自他の関係性の視點から分析し、なぜあらゆる情が露沙によって忌避されるのか考察した。一部内容が重複する部分もあることをお断りしておく。
- (9) 廬隱の小説が悲哀の情緒を基調としていることについては衆目一致するところであり、先行研究でも廬隱の不幸な生い立ちやショーペンハウアー哲学からの影響等が指摘されてきた。しかし、當てにならない人生を自分の力で切り開こうとする意識が、造物主に弄ばれ己の力ではその運命を變えることはできないという諦念へ變化する點については、あまり意識されてこなかったように思われる。『海濱故人』に限って見ても、造物主による己の運命への支配が意識されるのは主として、情から逃れられないことを露沙が自覺した後のことである。今後、他の作品に即しても、検討を重ねる必要があるだろう。